第７１次印旛地区教育研究集会
（社会科教育・小学校）

主体的に学びに向かう児童生徒の育成
～小中の学びを関連付けることを通して～

成田市立下総みどり学園
佐々木　光司

１．研究主題　　主体的に学びに向かう児童生徒の育成
～小中の学びを関連付けることを通して～

２．主題設定の理由

今，社会は目まぐるしい変革の時を迎えている。人工知能の飛躍的な進化による「Society5.0 時代」や，新型コロナウイルス感染拡大や災害などの先行き不透明による「予測困難な時代」の到来など，児童生徒がこれから生きていく未来は，一人一人が状況に合わせて試行錯誤する中で，個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出し，社会的変化を乗り越えていかなければいけない時代へと突入していくことであろう。

また，中央教育審議会答申においても育成を目指す資質・能力として「予測困難な社会の変化に主体的に関わり，感性を豊かに働かせながら，どのような未来を創っていくのか，どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」とされている。

これは，本校の学校教育目標の３つの柱である「しなやかな心を持った子」「進んで学ぶ子」「健康でたくましい子」や，具体的な内容である「困難にくじけない粘り強い心」と考えが重なる部分があり，これからの時代に求められる力と一致していると捉えることができる。

また，本校の児童生徒の実態として，「決められたことは真面目に行うことができるが，主体的に考えて行動する力は十分でない」という点があげられる。学習面でも，昨年度の成田市の学力テストの結果を見ると，「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が，全国・自治体の平均よりも低い学年が多く，これは全観点の正答率が低い学年ほど低いという相関関係も見られた。

そこで本研究では，「主体的に学びに向かう児童生徒の育成」を研究の中心とすることで，新しい時代を自ら切り拓いていけるような力を児童生徒に養っていきたいと考え，主題の設定を行った。

３．研究について

（１）「主体的に学びに向かう」を考える際，国政研の評価に関する資料には，下記のように書かれている。
[資料①]

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ
①知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面
②①の粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整しようとする側面という二つの側面から評価することが求められる。

そこで「主体的に学びに向かう姿」を，粘り強さと調整力の２点と捉え，以下のように定義していく。

「主体的に学びに向かう姿」
①粘り強さ⇒新しい課題や発展的な課題にも，諦めずに挑戦し，自分の考えを持つことができる力

②調整力　⇒自分の考えでは課題が解決できなかった時，友達の考えや既習の知識と関連付けて考える力

（２）[資料①]に，粘り強さとは，知識・技能，思考力・判断力・表現力の獲得に向けたものとあるが，児童の性格や気質に頼ることなく「主体的な姿」を求めるためには，最低限の知識は必要となってくると考える。
つまり，児童生徒が「主体的に学びに向かう」ためには，与えられた課題に対して，

◆一人一人の児童生徒が自分なりの“学びの材料”（知識・技能や見方考え方等）を持っていること
◆持っている材料を使って“学びの方法（対話・思考ツール・ICT の活用等）を一つでも知っていること

の２つが揃っていることが必要である。その２つが揃っている時に初めて，課題を解決しようとする姿が生まれ，その過程を何度も繰り返しながら解決にたどり着けた喜びを味わうことで，更なる課題に主体的に向かう姿が高まってくるのではないだろうか。

4　本校の実態より

平成２６年に小中一貫教育校として開校し，平成 29 年より義務教育学校となった。1 年生（小学校 1 年生）から 9 年生（中学校 3 年生）までが交流しながら様々な活動や行事を共にすることで，児童生徒の心身の成長を育んでいく学校である。本校は「9 年間の連続した学び」を意識した教育体制の構築を目指しており，教員が小学校や中学校などの垣根を取り払い，教科ごとに連続性の構築を図っている最中である。義務教育学校の環境を活かし，社会科において，異学年が同一題材を行うことで，双方に意味のある研究を行っていきたいと考えた。

5　印教研社会科研究部研究主題より

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習 ～自らの課題をみいだし，自らの考えを実現する児童生徒の育成を目指して～

副題にある「自ら課題をみいだし，自らの考えを実現できる児童」とは，自ら課題を見出し，その課題に向けて自分の考えをもち，表現することと考えた。この力を身につけた児童生徒を育むためには，問題や課題を自分事として捉え，自分で考えた手段で調べ，それを相手に伝え表現する力が必要である。その力を養い，育むために，本研究は義務教育学校の特色を生かした，小中の学びや交流を通して，多様な考えを共有したり交流したりすることで，主体的に学びに向かう児童生徒の育成を図ることが主題に迫ることができると考え，本主題を設定した。

6　研究仮説と手立て

【研究仮説１】

「協同的な学び」をとおして，考えたい・学びたいと思い，自らの考えもち，主体的に学ぶ児童生徒が育つだろう。

手立て①　異学年を意識した準備作業で自ら学ぶ姿勢を身につける。

＜6 年生＞

7 年生に向けた各グループの話し合いで，発表の仕方についてのアドバイスを行う。その中で，自分の考えをまとめたり，工夫した発表について考察したりすることで，発表を通して伝えたいことや，すでに既習している 7 年生にわかりやすく，伝えやすくするだけではなく，より深く事象に対する情報を集めたり，必要な情報を選んだりするなど，自分から学ぶ姿勢が身につくと考えられる。

＜7 年生＞

6 年生の発表に対して，意見や助言ができる準備をグループで行う。６・７年生で学習した内容の振り返りや確認する作業やさらに深めたいことは調べ学習などをすることで，さらに知識を深めることができ，意欲をもちながら自分から学ぶ姿勢が身につくと考えられる。

【研究仮説２】

小中の異学年交流をすることを通して，新しいことに気づき，学習の振り返りや，学習意欲の向上につながることで主体的に学ぶ児童生徒が育つだろう。

手立て②　６・７年生の異学年交流

本校の義務教育学校という特色を生かし，６年生が単元のまとめとして７年生（中学１年生）に発表をする。６年生の発表を聞き，７年生から感想や補足の説明をすることや話し合いの時間を取り入れることで，自分の意見を述べる機会となる。異学年のものの見方や考え方を知ることで，より高い意識で学習に取り組めると考えられる。

７　実践研究

（１）単元名

６年　歴史編「天皇中心の国づくり」

（２）単元の目標

・世の中の様子，人物の働きや代表的な文化遺産などについて，遺跡や文化財，地図や年表などの資料で調べ，大陸文化の摂取，大化の改新，大仏造営の様子を理解している。（知識・理解）
・世の中の様子，人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して，問いを見いだし，大陸文化の摂取，大化の改新，大仏造営の様子について考え表現している。（思考力・判断力・表現力）
・大陸文化の摂取，大化の改新，大仏造営の様子について，予想や学習計画を立てたり，見直したりして，主体的に学習問題を追究し，解決しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

（３）指導計画

【６年生（８時間扱い)】

過程	○学習内容・学習活動
見出す	○聖徳太子が行った政治について整理し，学習問題をつくる。 **学習問題**　聖徳太子がめざした天皇中心の国づくりは，だれが，どのように受けついでいったのでしょうか。
自分で取り組む	○聖徳太子の死後，だれが，どのような国づくりを進めたのか。 ○聖武天皇は，どのようにして世の中を治めようとしたのか。 ○聖武天皇の大仏づくりは，どのように進められたのか。 ○奈良に都があったころ，日本は，大陸からどのようなことを学んだのか。

広げ深める	○学習問題について調べてきたことまとめ，7年生に発表をする準備をする。
まとめあげる	○7年生に発表をする。 ○聖徳太子の思いについて，自分の考えをまとめる。

8　仮説の検証

【仮説１】

手立て①　異学年を意識した準備作業で自ら学ぶ姿勢を身につける。

異学年を意識した作業をすることによって，各学年以下のような様子が見られた。

＜6年生＞

今までは授業内の活動だけだったが，発表相手が学習内容を既習している7年生となると，意識が一転した。休み時間などを活用し，図書室で関係する本を借りグループで共有していたり，自宅で調べた内容や関連するホームページを印刷し，学校に持ってきたりする児童やグループが多くいた。また，わからない言葉や意味を教え合う様子や疑問に思ったことなどを自学でやってくる児童が増えた。

＜7年生＞

6年生が発表してきたことにしっかりと意見や補足説明ができるように準備をすることをテーマに，教科書や資料集をじっくりと見返し，理解できなかったところはメモや印をつけるなど工夫が見られた。また，友達や教師に聞くだけではなく，タブレットを使用し，インターネットや動画を検索し，理解を深めるなど，先輩として恥じの無いように準備をしようとする姿が見られた。

このことから普段の活動よりも，異学年と交流をするという意識を持つことで，作業効率が上がったり学習意欲に繋がったりすることで自分から学ぶ姿勢が見受けられることができた。

【仮説２】

手立て②　6・7年生の異学年交流

異学年の交流から以下のような反応や様子が見られた。

・7年生の補足説明に感心して聞いている6年生の様子が見られた。

・7年生が年上らしく，いい雰囲気を作ってくれたおかげで，6年生は安心して準備してきた発表をすることができた。

・7年生のリーダーシップもあり，意見の交換が活発に行われていた。

このことから聖徳太子の思いについてお互いが深く考えられる時間を共有することができた。

9　成果と課題

（1）成果

・異学年での活動は，児童生徒にやる気を出させ，学習意欲に繋がった。

・全員が既習し，知っている内容だったことから共感することや意見交換が活発になることができた。

・学年を超えた学習を行うことで，今受けている授業を大事にすることやこれから先の学習に活かしていこうという姿が見られた。

（2）課題

・6 年生は公民分野と歴史分野，7 年生は地理分野と歴史分野で単元の進度が異なり，単元計画も異なるため, 今回は 6 年生にとっては単元のまとめとしてできたが, 7 年生にとっては時期が違い過ぎたため, 調整が必要。

・異学年交流で発表となると時数が大幅に必要となる。定期テストや教科担任制で時数が取りづらいことから負担は大きい。事前の準備や内容の精査をしていく必要がある。

以上の振り返りから,「主体的に学びに向かう児童生徒の育成」として本研究は，本校の特色を生かした小中での交流を中心に行ってきたが，まだまだ改善しなければならず，小学校と中学校の垣根を越えた学習での関わりや深め合いについては試行錯誤していかないといけないことが明確になった。今後の課題とし，本校の「9 年間の連続した学び」を生かした授業づくりの研究をこれからも続けていきたい。